

学 位 論 文 題 名

The Nomadic Atlas: Formation and Becoming of Self in Contemporary American Fiction

（彷徨への地図：現代アメリカ文学における自己形成と生成変化）

学位論文内容の要旨

本論文は現代アメリカ文学、特に 1980 年以降の小説における、「われわれの現在」を問う試みを検討するものである。「現在」という地点における、自己の安定し統合された形態である「主体」あるいはそのアイデンティティの形成（formation）が権力作用の産物であるという批判的認識をふまえ、そのような自己を変容させること、すなわち「生成」（becoming）のポテンシャルを模索する作品群を扱う。

1960 年代から本格化した「ポストモダン文学」の運動が、メタフィクションやパロディといった手法を前面に押し出す中で、作品自体のテキスト性や表象としての存在といった概念を意識的に活用し、「主体」や「現実」の自明性に挑戦する試みを行ってきたことは、多くの研究者によって指摘されている。しかし、1980 年代以降の小説に目を向けるならば、そのような従来の「ポストモダン文学」という枠には収まりきらない作品が登場していることが注目されてしかるべきであろう。Steve Erickson や Don DeLillo などの小説においては、時空間という枠組みを再構成し直すことから、主体とそのアイデンティティの変容の可能性を探るという試みが見られる。このように、従来の「ポストモダン」概念とは異なる角度から「主体」への挑戦を試みる現代文学の動向を検討するのが本論文の研究である。したがって、本論文においては単独の作家を対象を絞るのではなく、現代アメリカ小説の中から 10 人の作家を取り上げている。また、各テキストにおいて問題となる主体のアイデンティティとは、「アメリカ人」「個人」「男」「兵士」「人間」など、それぞれ具体的な形態において提示され、それに対する生成の試みも各テキストに特有の戦略とスタイルを持つ。したがって、博士論文のそれぞれの章は個別の作品論にあてられている。

「序論」は論文全体における方法論の整理を中心とする。「現在」における自己のアイデンティティ、主体という統一性から逃れようとする運動とは、自己という「内部」に変容あるいは生成の可能性を見いだすことであり、各章において検討されるテキストとは「現在」における自己の形成と同時にそこからの離脱の可能性を探る、一種の境界線上にあるものとしてとらえられる。

まず問題となるのは、アイデンティティが権力の作用と不可分であり、そこから逃れようとする運動とは政治的な色彩を帯びることになるという点である。第 1 章では Paul Auster による

Leviathan (1992)を取り上げ、1980年代のレーガン時代における保守主義のアイデンティティ戦略に対する抵抗の試みを検討する。「生成」はここではポリティカルな側面を明らかにするが、その抵抗が目指すべき終着点として理想的なアイデンティティを保持することが抱え込む限界をも露呈していく。第2章では Steve Erickson の小説 *Rubicon Beach* (1986)を論じ、理念的な「アメリカ」とは異なる「アメリカ」の姿を浮かび上がらせる試みを検討する。登場人物と設定が時空を超えて交錯するこの小説において、過去、現在、未来は直線的な秩序を形成することはない。ここからは、目的論的な統合を欠いた「アメリカ」が導き出される。第3章では Anthony Doerr による短編“The Caretaker” (2002)において、リベリア内戦、すなわちエスニックなアイデンティティが暴力と直結した事態を舞台とし、この短編がアイデンティティそのものを乗り越える試みを探る。この作品において保持されるのは、アイデンティティの成立が空間をある形式で実践することと不可分であるという点であり、その変容の可能性は異なる空間を実践することに見いだされる。

このようにアイデンティティと空間を問題化するならば、必然的に「身体」が検討されるべき主題となる。第4章で検討されるのは Paul Theroux の *The Mosquito Coast* であり、アイデンティティが取りうる形の一つである「男」、特にアメリカ的“self-made man”の形成メカニズムを考察している。第5章は Stephen Wright の *Meditations in Green* (1983)を論じ、「男」というアイデンティティの一つである「兵士」をめぐり、そこからの生成の可能性を身体における知覚の変容において模索する小説として検討する。第6章では Jeffrey Eugenides の短編“Air Mail” (1996)を検討し、「非人間的」要素と結びついた身体が出現させる新たな自己を追求する物語として論じる。第7章は Denis Johnson による *Already Dead: A California Gothic* (1997)を取り上げ、この小説がニーチェとノワールという要素を混合させながら、最も苛烈に「男らしさ」からの出口を探し求める力学を論じる。第8章は Rebecca Brown の小説 *The Dogs: A Modern Bestiary* (1998)を検討し、動物と区別において成立する「人間」という概念そのものを突き崩し、むしろ動物による身体的触発から未知なる身体を導き出そうとする試みとして論じる。

こうした身体性への着目と同時に、自己が抱え込む変容の潜在性とは時間そのものから決して無縁ではない。この観点から第9章で検討されるのは Don DeLillo の *The Body Artist* (2001)であり、「人間」という概念そのものへの問いを時間という角度から考察する。「人間」というアイデンティティを支える論理である「個人」「現在」「アイデンティティ」といった原理に代わり、より流動的で非人称的な次元の存在が追求される。第10章では Kate Braverman の短編“Histories of the Undead” (1998)において、生成そのものとしての時間が「歴史」という時間と相容れないものであるという点を論じる。因果関係、名前とその永続性に特徴づけられる歴史の把握を逃れる変容の時間が表現されている。

「結論」においては、各章において提示された、「生成」の姿を束ねる形で、「共同性」という問題を考察し、Auster のニューヨークから Braverman のロサンゼルスへ至る過程が浮かび上がらせる「アメリカ」の姿を検討する。「アメリカ」の基盤として継承されてきた「個人」という概念、

そして近代的な時空間の枠組みが生成を基盤としてとらえ直されることにより、異質な存在が互いを触発し、相互に変容を引き起こすポテンシャルの場としての「アメリカ」が最終的に姿を現すことになる。

学位論文審査の要旨

主 査 助 教 授 瀬 名 波 栄 潤

副 査 教 授 長 尾 輝 彦

副 査 助 教 授 村 田 勝 幸

副 査 教 授 柴 田 元 幸 (東京大学大学院人文

社会系研究科英語英米文学専門分野)

学 位 論 文 題 名

The Nomadic Atlas: Formation and Becoming of Self in Contemporary American Fiction

(彷徨への地図：現代アメリカ文学における自己形成と生成変化)

本論文の研究成果

本論文は 1980 年以降のアメリカ小説における、「生成」概念を検討するものである。「主体」あるいはそのアイデンティティが権力作用の産物であるという批判的認識をふまえ、時空間という存在論的枠組みを再構想することから「生成」あるいは自己の変容を模索する現代小説の動向を、個別の作品論を通して検討している。

まず問題となるのは「アメリカ」を主題とする小説であり、アイデンティティを基盤としない「アメリカ」を描き出そうとする試みは既存の政治的諸力への挑戦を伴うという点である。この視点を中心として、第 1 章では Paul Auster の *Leviathan* (1992)、第 2 章では Steve Erickson の小説 *Rubicon Beach* (1986)、そして第 3 章においては Anthony Doerr による短編“The Caretaker” (2002)での「アメリカ的」アイデンティティの問題化を検討している。

次いで、必然的に「身体」が検討されるべき主題となる。身体とはそこから特定の主体性が引き出される場であると同時に、生成の潜在性を抱え込んだものとして捉えられていくことになる。第 4 章の Paul Theroux の *The Mosquito Coast* において「男」が身体を舞台として形成されるメカニズムを考察し、第 5 章での Stephen Wright の *Meditations in Green* (1983)、第 6 章の Jeffrey Eugenides の短編“Air Mail” (1996)、第 7 章の Denis Johnson による *Already Dead: A California Gothic* (1997)、第 8 章で検討する Rebecca Brown の小説 *The Dogs: A Modern Bestiary* (1998)は、身体において新たな自己を形成するポテンシャルを追求する小説として論じている。

こうした身体性への着目は時間という問題と無縁ではない。この観点から第 9 章では Don DeLillo の *The Body Artist* (2001)を、そして第 10 章では Kate Braverman の短編“Histories of the Undead” (1998)

を検討し、時間が自己の変容の条件として捉えられていることを論じている。

以上のように、各章の議論においては、保守主義への問いや身体、マスキュリティなど、個別の小説で展開される具体的な問題を、Michel Foucault や Gilles Deleuze らの現代思想に言及しながら考察している。それにより、論文全体としては「生成」という概念が発動しうる領域の幅広さを示すものとなっている。

学位授与に関する委員会の所見

80年代以降の現代アメリカ文学を位置付けることは容易ではない。特に、それらを従来の文学批評や理論によって説明しようとするならば、多くの矛盾と否定を招くことになる。本申請者は、今を生きる作家達の現代へのまなざしを肯定することにより、21世紀的文学解釈の手がかりを求めており、そこに最大限の評価をすることができよう。テキストの精読と先行研究や現代思想への理解と応用は、課程博士学位論文として十分な水準に達していると本委員会は評価した。

公開で実施された口述試験では、アメリカ文学史やアメリカ史についての一般的な質問に加え、申請学位論文における作家の選択基準、虚構と現実との関係性、または抽象的な表現等について、審査委員から多くの意見や質問が出された。それらに対し、時代的コンテキストとの距離の取り方の不安定さや表現の抽象性については、今後の出版に向けての課題とし謙虚に受け入れる真摯な側面を披露する一方、申請者は、自らの論を展開する際には、審査委員が驚くほどの質量の資料に言及しそれらをダイナミック且つ丁寧に説明する等、申請者の中に築かれた知力と知性は審査委員を大きくうなずかせた。

以上のことを総合的に評価し、本委員会は全員一致して、本論文の著者藤井氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。